

優秀修士論文概要

カント倫理学における道徳的行為の主観的源泉

中 村 涼

はじめに

本研究は、イマヌエル・カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の倫理学を、道徳的行為における〈主観性〉という観点から捉え直し、ひとつのカント倫理学解釈を展開したものである。

カント倫理学の根幹には、普遍的で客観的な「道徳法則」が人間の従うべき原理として据えられており、研究史においても、またカント批判の文脈においても、このような客観面についての研究が中心だった。これに対して本研究は、カント倫理学がただ客観性だけに足場を求めたものではなく、人間の主観性に定位した上で、その主観的なものが客観的たり得るところに道徳の場を開いたものだということを示すものである。

このために本研究は、カントが『実践理性批判』（1788）をはじめとする著作や講義録で、人間における主観的なものとして挙げる諸概念に着目した。これらの概念について考察することで、それらの概念がいかに人間の道徳的な意志規定に関係し、その際に重要な役割を果たしているかを明らかにした。具体的には、第一章で「尊敬（Achtung）」、第二章で「関心（Interesse）」、第三章において「格率（Maxime）」の概念について論究した。最後に第四章で、これらの諸概念と主観的な道徳的意識の源泉である「理性の事実（Faktum der Vernunft）」について考察し、〈カント倫理学における道徳的行為の主観的源泉〉について体系的な理解を得ている。

第一章 カント倫理学における尊敬

カントは、「尊敬」という概念を道徳的行為の「動機」、すなわち意志の主観的規定根拠として論じる。この尊敬概念は、カントの批判期以降の著作に頻出し、多様な文脈で論じられる概念である。したがって、第一節では『道徳形而上学の基礎付け』（1785）、『実践理性批判』、『道徳形而上学』（1797）それぞれのテキストを検討し、カントが用いる尊敬概念の意味について統一的な理解を得た。各著作において様々に論じられながらも、尊敬という概念の根幹にある内容は〈道徳法則という普遍性へのひたすらの注目〉である。

これを踏まえ第二節、第三節では、カントのテキストの他、国内外の研究を参照し、尊敬の本質的な役割を二点捉えだした。ひとつには尊敬がひたすら〈道徳法則に対する〉ものである点、またひとつには尊敬が消極的・積極的な感情作用を持ち〈感性的動機を退けると同時に、道徳的な動機となる〉点である。

これらの検討を経て、尊敬とは道徳的行為の主観的根拠であり、道徳法則のように行為の善さを判定する「判定原理」としてではなく、行為を実際に遂行させる「執行原理」としての役割を担っていること、さらに尊敬は、人間の感性的欲求に基づく「傾向性」の影響を弱め、私たちの意志規定を道徳法則

に従う方向へ向け変えるというはたらきを持つことを明らかにした。

第二章 カント倫理学における関心

第二章では、カント哲学における「関心」概念の検討を行った。関心は道徳哲学の文脈に限られず、カントの多くの著作に用いられる概念である。人間理性には固有の関心があり、それゆえ、理性の批判を旨とするカントの思想、特に三批判書においては、関心はそれぞれの著作における理性使用に応じて言及されることになる。そこで本章第一節では、関心概念の内実を明らかにするために、カントの理性的探求の代表作である三批判書、すなわち『純粋理性批判』（1781/1787）、『実践理性批判』、『判断力批判』（1790）を取り上げた。そこで各著作における関心概念について考察を行い、これらに共通する関心概念の中核を〈その対象を、理性的に自己利益として表象すること〉であると明らかにした。

第二節においては、本論文の主題に関わる「道徳的関心」の検討に移った。道徳的関心は、その内実の把握にいくつかの困難を含んでいる。ひとつには、〈純粋理性が関心を抱く〉ということ自体の理解の困難であり、またひとつには道徳的関心と尊敬の関係を理解することの困難である。これらの問題を解決するため、カントのテキストおよび先行研究を手引きとして考察を行った。これにより前者の問題を、純粋理性の関心とは、意志規定、行為において〈首尾一貫した筋を通すことを、理性が自己利益として表象する〉ことであると解釈し、解決した。後者の問題については、道徳法則に対する尊敬の意識によって、法則に従うことへの関心が生じるとして、尊敬と道徳的関心を単純に同一視する道を回避した。

第三節においては、『実践理性批判』『純粋実践理性の方法論』の記述を検討し、尊敬と関心の両者が共に意志規定の基盤としての「心術」を形作ることを示した。さらに、この心術は、尊敬と道徳的関心を強化することによって陶冶され得ることを明らかにした。

第三章 カント倫理学における格率

第三章では「格率」概念について検討を行った。道徳的行為における主観性に着目した際に尊敬、関心の概念に続いて問題となる概念は〈意欲の主観的原則〉としての「格率」概念である。第一節では、格率概念の本質的特徴をその主観性と原則性から明らかにした。格率は主観的なものとして客観的法則である実践的法則とは性質が異なる一方で、原則的なものとして普遍性を伴わなければならない。つまり格率とは本質的に〈私は（同様の状況下では）いつでも斯く斯くに行為しよう〉という主観的普遍性を持つものである。

加えて道徳的な格率の特徴として、カントのテキストには、道徳的な格率に基づいた行為は〈嫌々ながら〉行われるという記述が散見されるという点がある。私たちは義務を心底の嫌悪を抱いて遂行しなければならないのだろうか。そうだとすれば、カント倫理学はひたすらに苦痛を強いるという点で、人間にとって遂行不可能なものに留まってしまうのではないだろうか。この問題を解決するために、第二節では道徳的な格率を採用することの内実を考察した。これにより、行為の主観的原則としての格率は、主観自身の意欲に基づいて積極的に選び取られていることを示した。さらに道徳的な格率に含まれる意欲は道徳的関心であることを確認し、この関心は道徳的行為を主観自身にとって〈自己利益〉として表象し、これによって主観は行為に際して嫌々ながらでないのみならず、理性的に自己利益を追求する積極的意欲を持っているということを主張した。

第三節では、道徳的格率に基づいて行為する主観の心の状態について『単なる理性の限界内における宗教』（1793）の記述を手引きとして考察した。これにより、この心の状態とは、自身の立法の下に自ら立つという〈自己自身との一致〉への満足感であること、そしてこの満足感を伴い行為する主観は意気消沈して法則に従属するのではなく、むしろ逆のこと、すなわち〈快活に〉道徳的にふるまうことができることを主張した。

第四章 カント倫理学における「理性の事実」

第一章より検討してきた〈道徳的行為の主観的源泉〉の理論が究極的に依拠しなければならないのは、カントが道徳法則の意識であると表現する「理性の事実」についての議論である。この拘束性の意識を除けば、私たちには自身を自由な行為者として意識する論拠は与えられず、また自身を自由な行為者として、主観的に規定する動機も生まれない。したがって、道徳的行為における主観的な源泉について体系的な理解に至るため、第四章ではこの理性の事実という概念について考察した。

第一節では理性の事実という概念について、「事実」という語のラテン語の原義とカントの著作における用例、および先行研究から検討した。これによって、この概念には二つの側面、すなわち純粹理性の自己活動性と、それによって与えられる根本法則の意識というそれぞれ異なる意味があることを認めることができた。さらにこの事実が私たちに明らかにするものについて、それは自由という概念であることを確認した。

第二節では理性の事実について理解を深めるため、カントの「性格」概念に注目した。まず『純粹理性批判』および『実践理性批判』で用いられる性格概念の意味と区別を確認した上で、人間が道徳的に行為する根拠は、悟性界における超感性的自然としての人間の「可想的性格」にあることを明らかにした。さらに、理性の事実こそが、この自身の可想的性格を意識させる根拠としてはたらいっていることを示した。

第三節では、理性の事実の内実と、第一章より検討してきた尊敬、関心、格率との関係を論じた。理性の事実は人間の意識に直接与えられるものとして、私たちには否定しがたい拘束性の意識である。そしてこの拘束性から意識されるものが、道徳法則の無条件性と威信である。この威信は尊敬の作用を引き起こし、この尊敬を通じて、私たちは自身が善くあらうという道徳的関心を抱いていることを洞察する。さらにこの尊敬と道徳的関心に基づいて格率を反省し、この反省を繰り返す自身の道徳的動機を強化してゆくことで、自らの格率採用の根拠である性格および心術を強化してゆくことができるのである。

おわりに

本研究によって得られた理解は以下のものである。カント倫理学は、道徳的思惟をあくまでも主観から始めている倫理学であり、従来誤解されてきたように人間の存在様式から乖離した無理難題を私たちに押し付けているのではなく、むしろ私たちの内側から発する道徳的意識を問題としているのである。私たちが自分にとって抜き差しならない道徳的問題に直面した時、悲しみに暮れ義憤に駆られながらもどうするべきかを考え始める時、自分が生きる規則は何だったのか、そして自分の最高の規則として何を認めているのかに出会うことを、そしてその規則は単に主観的であるのみならず複数の存在者が生きる世界の法則として可能であることを認識するに至るという、主観を離れられない人間に即した思索の根拠と正当性を、カントはその哲学において示していると言えるのではないだろうか。